母の苦しみ 核の罪

県遺族代表の杉本さん（玉名市）

式典参列 「平和を」願い新た

「核のない平和な世の中になってほしい」―。6日、広島市で開かれた平和記念式典に熊本県の遺族代表として玉名市の杉本珠美さん(59)が参列した。被爆73年の今回は、平成最後の式典。杉本さんは原爆死没者慰霊碑に手を合わせ、新しい時代の平和を願った。

【1面参照】

2018 ヒロシマ ナガサキ

平和記念式典に参列後、広島赤十字病院の特別展を訪れた（左から）杉本瑞花ちゃん、珠美さん、川上かをるさん＝6日、広島市

昨年9月に87歳で亡くなった杉本さんの母、西田シマエさんは宮崎県日之影町出身。15歳の時、学徒動員の看護師として広島市の広島赤十字病院で働いていた。

1945年8月6日午前8時15分。病院の窓が突然、真っ白に光り、ごう音とともにガラスが噴き散った。気付いた時には誰かに背負われ、病院の地下にいた。やがて、被爆した人たちがうめき声を上げながら、続々と集まってきたという。

爆心地から約1・5キロ。病院は倒壊こそ免れたものの壁や天井のがれきが散乱し、職員と患者合わせて50人を超える死者が出た。シマエさんも左脚を骨折したが、3カ月後に兄が迎えに来るまで、十分な治療は受けられなかったという。

シマエさんは戦後、結婚を機に荒尾市で生活。長女の杉本さんと次女（川上）かをるさん(55)の娘2人を育て上げたが、長年貧血に苦しみ、倒れることもあったという。被爆者に多い、再生不良性貧血と診断された。

原爆のことは、家族にもほとんど話さなかった。「母はものすごい恐怖を15歳で経験した。思い出すのも嫌だったんだと思う」と杉本さん。家族が広島旅行に誘っても「行かんちゃよか」と言うだけで、生涯足を向けることはなかった。

「被爆した時の話を教えて」。2011年に起きた東京電力福島第1原発事故の後、杉本さんは思い切ってシマエさんに尋ねた。多くは語ってくれなかったが、それでも、あの日見た「光」のことや、当時の病院の状況などをポツリポツリと話してくれた。「自分がそんな目に遭うなんて考えられない」。杉本さんは核の恐ろしさを実感したという。

シマエさんの名前はこの日、原爆慰霊碑に納められた死没者名簿に新たに記された。式典には杉本さんと、かをるさん、シマエさんのひ孫の杉本瑞花（みはな）ちゃん(5)も参列した。

式典後、3人は近くの平和記念資料館も訪問。広島赤十字病院の特別展に立ち寄り、当時の写真や遺品などを見つめた。「母が受けた苦しみは、一瞬ではなくならない。平和を祈り続けたい」。時代の区切りを前に、杉本さんは思いを新たにした。（臼杵大介）

平和記念式典に参列後、原爆死没者慰霊碑に手を合わせる杉本珠美さん